

朱雀大路・二条大路（平城京右京三条一坊一坪・八坪）の調査（平城第566次）

奈良文化財研究所では、国土交通省が進めている史跡朱雀大路等の整備にともなう発掘調査を2015年から実施しています。今回の調査は、朱雀門前における朱雀大路西側溝と二条大路南側溝、ならびに西一坊坊間東小路の位置と規模を解明することを目的として、東西2ヵ所の調査区を設定しました。調査面積は東区が360㎡、西区が324㎡で合計684㎡、調査期間は2016年4月5日～7月27日です。

東区では、朱雀大路西側溝と二条大路南側溝との合流点を検出し、西側溝は二条大路を横断することを確認しました。西側溝の幅は3.7～5.0mと場所により差が大きいですが、東岸に護岸の杭列が検出されており、当初は約3.7m幅で直線状に掘削されたものと考えられます。二条大路南側溝から流れ込む水量の多さから合流部分では東側に大きくあふれていたようです。また、合流点より北側の西側溝は新旧2時期にわけられ、新しい溝は幅をやや狭くして掘りなおしていることもわかりました。東岸で検出されたしがらみ護岸は二条大路南側溝との合流点より北側で特に残りが良く、0.4m間隔で杭を斜

めに打ちこみ、その間に5本以上の細い枝をわたして籠状に編んだ構造が判明しました。

西区では、二条大路南側溝と西一坊坊間東小路との交点のほか、二条大路を横断する南北溝を検出しました。南側溝はこの南北溝との合流点より東側で幅が広く、深さも深くなり、溝底からは堰かしがらみとみられる杭も検出されました。

南北溝はこれまで知られていない溝で、朱雀門から約90m西側の位置にあたります。最大幅3.8m、深さ0.8mと二条大路南側溝と比べても遜色のない規模のものです。二条大路南側溝と一体で機能し、同時に埋め立てられました。合流点では溝壁が大きくえぐられており、かなりの水量があったとみられます。南面大垣周辺または宮内の排水を二条大路南側溝へ流していたものと考えられます。

西一坊坊間東小路では、西側溝は検出されましたが東側溝は検出されませんでした。西側溝は幅1.6m、深さ0.5mとやや小規模で、二条大路南側溝との合流点にかけて埋土に多量の瓦が含まれていました。三条一坊八坪には築地塀の存在が推測されます。

今回の調査で検出した条坊道路・側溝の規模・位置は、これまで奈文研や奈良市がおこなってきた発掘調査の成果と整合し、朱雀門前の条坊道路や側溝の配置は朱雀大路を中心に東西対称に計画されていたことを具体的に確認できました。さらに、朱雀門西南側の排水計画もあきらかになってきました。溝の埋土に含まれる土器から、これらの溝は平城京廃絶後もある程度存続していたと考えられます。

いっぽう、二条大路を横断する溝にかかる橋等の存在や、南北溝と二条大路北側溝や南面大垣との関係は解明されませんでした。周辺調査の進展が期待されます。（都城発掘調査部 番 光）



西区全景（右奥が東区、南西から）



朱雀大路西側溝東岸のしがらみ護岸（東区、西から）